

弱さの中のクリスマス

[ヨハネによる福音書 1章 1～18節]

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。彼は光ではなく、光について証しをするために来た。その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

[1] ヨハネ福音書のクリスマス

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た」。

只今読んで頂いたヨハネ福音書 1章 14節の言葉は、ヨハネ福音書におけるクリスマスと言われています。マタイやルカのようなクリスマス物語のような形ではありませんが、クリスマスの本質をズバリ一言で語っている言葉です。クリスマス、それは無限なる神ご自身が、有限の中に形をお取りになった日とも言えます。

「言葉は肉となった」。神の「言葉」（ギリシア語でロゴス）とは、分かりやすく言い換えると「神の本質」とか「神のご意志」と言っても良いと思います。この方を見れば、神様がどのような方かが分かる、神様の思いというものが分かる、イエスとはそういう「神の言葉」として、この私たちの世界に、実際に肉体を取って

下さった、というのです。神学用語では「**受肉**」と言います。肉体を授かることです。カトリック教会では「**托身**」とも言っていたことがあったようです。

そうか、そういうことか、と理屈では分かった気がするのですが、実はこのことは本当には分かり切ることが出来ない、秘儀中の秘儀、神秘中の神秘、もっと言えば**生まれつきの人間の頭にとってはつまずき**となって当然のことなのです。先ほどのヨハネ 1 章の聖句の中に「**言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった**」と記されていたとおりです。事実イエス・キリストは当時の者たちから「お前は自分を神と等しい者としている。神と人間は決定的に違うのだ。お前は神を冒瀆している」ということになって鞭打たれ、裁かれ、処刑されることになったわけです。旧約聖書では、ある意味、神は「**聖**」であり人間は「**俗**」であるというわきまえがしっかりしていました。ですから主イエスが「**わたしと父とはひとつである**」（ヨハネ 10:30）と言われたような言葉は狂気を孕んだ言葉のように思われていたのです。しかし「**神が人となった**」。それがクリスマスです。これは、神様が**新しい時代(新約聖書)**を何としても始めなければならない**最終手段**と言いますか、**一大決意**であったということを私たちは知らされます。

神様が人間となられるその形について、聖書は驚くべき描写をしています。彼イエスは、自分では何もすることが出来ない幼な子としてこの世に送られました。当時の無名の庶民の一少女である**マリア**の胎の中に宿ったのです。本当にマリアは大変だったと思います。まず、これは皆が喜んでくれるような妊娠と出産ではありませんでした。「**あなたは男の子を生む。それは聖霊によるものだ**」という御使いの告知をマリアは受け入れましたが、人々の誤解と好奇心に耐えなければならなかったでしょう。それで**ヨセフ**も苦悩し、婚約破棄寸前まで行きました。しかしマリアと同じように、み使いが語る「**恐れることはない**」という御告げを受けて、ヨセフはマリアを妻として迎えたのですが、その後、時の権力者ローマ総督の勅令が出、二人はガリラヤからダビデの町ベツレヘムまで 200 キロの長旅を強いられます。私は最近 DVD で『**マリア**』（原題は「Nativity story」）という映画を見たのですが、途中川を渡る時にロバが転倒して乗っていた身重のマリアが川に流されるという場面がありました。ヨセフによって助けられますが、そんなこともあったかもしれません。しかもベツレヘムに到着し、マリアは月が満ちても、泊まる場所さえ見出すことが出来ず、ある家畜小屋の中で、ヨセフだけがそばにいてそこで出産をしたのです。何という危なっかしい話でしょうか。神様、救い主をこの世に送るのであるなら、もっと確実に、もっと安心出来る方法を取ることも出来たのではないのでしょうか？

このヨセフとマリア、ある意味**全く弱い夫婦**です。時代にも権力者にも翻弄されています。しかし私はここに大きな慰めを感じるのです。映画『マリア』ではベツレヘムへ向かう旅の途中、黙々と従うマリアがヨセフに「ねえ、あの夢の話聞かせて」という場面がありました。あの話というのは、ヨセフに御使いが現れて「恐れずマリアを妻としなさい。彼女は聖霊によって男の子を産む。この子はご自分の民を罪から救うのだ」と言われた話です。二人は、砂漠のような道や危険な場所も通過する旅をしながら、いつも**「天」を見上げていた**のです。自分たちの思いを第一にするのではなく（そうであれば二人は別れていたでしょう）、**天からの声**に従って歩んだのです。それは、無力で庶民の彼らに、天の声、「神の言葉」がいつもあったということです。その神の言葉が「人」になったのです！ 私たちの間に宿ったのです！**「その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は『神は我々と共におられる』という意味である」**（マタイ 1:23-24）。この神様の約束はまずこの二人において実現したのではないのでしょうか。

[2] 主イエスは、インマヌエルなるお方

そして驚くべきことに、イエスは力ある成人ではなく、**全く無力で無防備な赤子**として、誕生しました。人間の赤ちゃん程弱い存在はありません。他の動物や鳥、魚は割と短い期間で成長しますが、人間は、長い時間をかけて、**ゆっくりとゆっくりと成長**していきますよね。そして、それぞれの人生の長さがあります。人生の長い短い自分では決定できません。けれども総じて長寿社会になりました。人生の道のりは長いのです。オギャ〜と生れて、様々な経験をし、知識を蓄え、今度は次第に様々なものを手離してゆく。体も弱くなっていく。今私の父などは本当にそういう中を生きていますが、**主は、インマヌエルであるお方**です。どんな人生の歩みの中でも、弱さを抱えながら生きる時の中でも、神の子イエスは「私たちの間に宿られている」お方だと聖書は告げています。

そして、私たちは自分自身の中に、時折**自分でもどうしようもない弱さを、罪**を見せつけられることがあります。以前お話したことがありますが、私はこの3月に89才で母を主の許に送ったのですが、その少し前までもう何度も入院や通院を繰り返していました。母が最期の時、私は施設の中で母の手を握り、いつの間にか呼吸をしなくなった母と一緒にいることが出来、それは慰めでもあったのですが、数日後、母の洋服や荷物を整理した時に、母の小さな日記が見つかりました。そこをパラパラめくっていたら、こんな言葉が残っていたのです。それは確か一昨年、私が病院に付き添った時のことでした。その日は随分検査に時間がかかり、日曜日のための準備が出来ないという自分勝手なフラストレーションがありました。母のその日記には、「今日の勉はとでもイライラしていた。

私にも酷い言葉で当たっていた。働きながら牧師もしているから忙しくて疲れているのだろう。こんな体で申し訳ない…」と書いていました。脳天を殴られた気がしました。たった一人の母、病気でいつも苦しみを抱えていた弱い母に私はどんなに酷い言葉や行いをしていたことか。母の思いに恐ろしい程鈍感な私です。急に後悔の念が拡がり、胸を締め付けました。お母さん、ごめん。自分はダメな奴だなど思いました。母の弱さは体の弱さ、しかし、私の弱さはもっと惨めなものだと思いました。正に私は罪人です。

クリスマス。神の独り子が弱い肉体を取って来て下さいました。私たち生身ある人間と一体化するためです。私たちの弱さ、罪をご自分が担って下さるためです。飼葉桶のキリストには既に十字架の贖いが暗示されています。何故神様はそこまでのことをなさるのでしょうか。それは、私たちは、どんな存在であろうが神様から見捨てられることはないのだということを告げるためではないでしょうか。ヨハネ 1:11~12 に、「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」とありました。神様は、私たちの所に来たのです！まず神様が私たちを愛して下さい、御子イエスを私たちに送って下さったのです。私たちの弱さも罪もあるままで、いや、あるからこそと言っても良いでしょう、イエス様は、私たちの人生を初めから共に歩むために飼葉桶の中に幼子として生まれて下さったのです。

ヘブライ人への手紙 4 章 15 節にこのような言葉があります。—「(イエスは)、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。」

この方の心はいつも私たちに向かっています。主は私たちの弱さを思いやる事が出来るお方。苦しみを共にし、嘆きを共に嘆いて下さいます。そして私たちの気付かぬ先から共に歩んで下さるこのお方は、終わりの時も必ず共におられます。インマヌエル。神我らと共にいます！これがクリスマスの私たちへの愛の言葉です。「光は闇の中に(こそ)輝いて」います。神様から与えられたこの体、この命を、恵みとまことに満ち満ちておられるイエス様に依り縋りながら、ご一緒に歩んで参りましょう。私たちを迎えてくれるのは、闇ではなく、「光」なのです。

お祈り致します。

主よ、御子イエス様をために送って下さって感謝致します。主イエス様はあなたの心そのものです。その心を素直に受け入れることが出来ますように。弱さも罪のあるままに、インマヌエルなるあなたと共に生きることが出来ますように。あなたの光の中に共に歩ませて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。